

日本語におけるイントネーション型と 終助詞機能の相関について

大島 デイヴィッド 義和*

On the Relation Between the Intonation Types and the Functions of
Discourse Particles in Japanese

David Yoshikazu OSHIMA

Abstract

It has been acknowledged in the literature that the interpretation of discourse particles (sentence-final particles) in Japanese is largely affected by intonation. There is much room for investigation, however, as to how exactly the discourse particles and intonation interact. In this work, I demonstrate that four types of contours — insisting rise, question rise, flat, and rise-fall — have to be distinguished for the purpose of analyzing the functions of discourse particles, and examine the functions of the two paradigmatic discourse particles *yo* and *ne* as accompanied by different contours. *Yo* can be accompanied by the question-rise, flat, or rise-fall contour. *Yo* with the question-rise contour has two distinct functions, and *yo* with the flat contour has four. *Yo* with the rise-fall contour has similar functions as *yo* with the flat contour, but additionally conveys an emotive and childish tone. *Ne* can be accompanied by any of the four contours. *Ne* with the insisting-rise contour has three distinct functions, and *ne* with the question-rise contour has two. *Ne* with the flat or rise-fall contour has similar functions as *ne* accompanied by the insisting-rise contour, but additionally conveys an emotive (but not necessarily childish) tone.

1. はじめに

日本語の文末イントネーション¹⁾と終助詞の意味機能の関わりについては、これまで多くの研究で取り上げられてきたが、十分に解明されていない部分も多い。本稿では、終助詞研究を行う際にどのようなイントネーション型の分類を念頭に置くべきかを検討したうえで、代表的な終助詞「よ」「ね」の意味機能とイントネーション型の対応関係を考察する。

終助詞（文末詞、談話助詞）という範疇に何を含めるかについては研究者によって必ずしも意見が一致しない。本稿では「よ」「ね」の他、「ぜ」「ぞ」「な」「の」²⁾「さ」「わ」「もの（もん）」を終助詞とみなすが、これら以外にどのようなものを含めるかについては判断を保留する。

終助詞は、疑問文や命令文、あるいは断片的な発話（例：「気が向いたらね」）の末尾に現れたり、文中で間投的に用いられたりする場合があるが、本稿では平叙文の述語の末尾に終助詞が現れる場合のみに議論を絞る³⁾。

*名古屋大学大学院国際開発研究科准教授

また、「よね」「の(だ)よ」のように、終助詞が他の終助詞や助動詞と共起する場合も考慮の対象から外す。

2. 日本語(標準語)文末イントネーションの分類

日本語(標準語)の文末イントネーションの分類には諸説あるが、郡(1997)による5分類—強調上昇調、疑問上昇調、上昇下降調、平調、下降調—が、比較的広く受けいられている。本稿でも、基本的にこの分類法を採用する。これに対して、Venditti(2005)は下降調と平調を分けず、3種の句末境界音調と、句末境界音調の不在による4分類を提示している。また、上昇調の下位区分を論じた川上(1963)では、郡の疑問上昇にあたる音調を3分類している。郡、Venditti、川上の分類および用語・記法の対応関係をまとめると、表1のようになる。表の最右列に、以下本稿で用いる記法(郡の記法に準じるが、「平調」に↘の記号をあてる)を示す。

強調上昇調は、強い主張を示す場合や、文中の情報構造的焦点を明示する場合などに用いられる音調である。郡(1997)では、「ど

うしても茸(きのこ)を食べたい」という意思を伝えるために、「きのこ！」を「木の独楽(きのこま)」の最後の「ま」を言わずに止めるのと同じ言い方で言うときの音調、と説明している。

疑問上昇調は、典型的には問いかけに用いられる音調である(ただし、終助詞「よ」とともに用いられる場合など、問いかけ以外に用いられることもある)。強調上昇と比べて、疑問上昇によるピッチ変化はよりはっきりとした凹型を描く(Venditti 2005: 182)。川上の「第二種」は「第一種」と比較して上昇の始まるタイミングが早い。また、「第三種」は上昇が遅く始まり、また上昇の幅が大きくなることが多い。

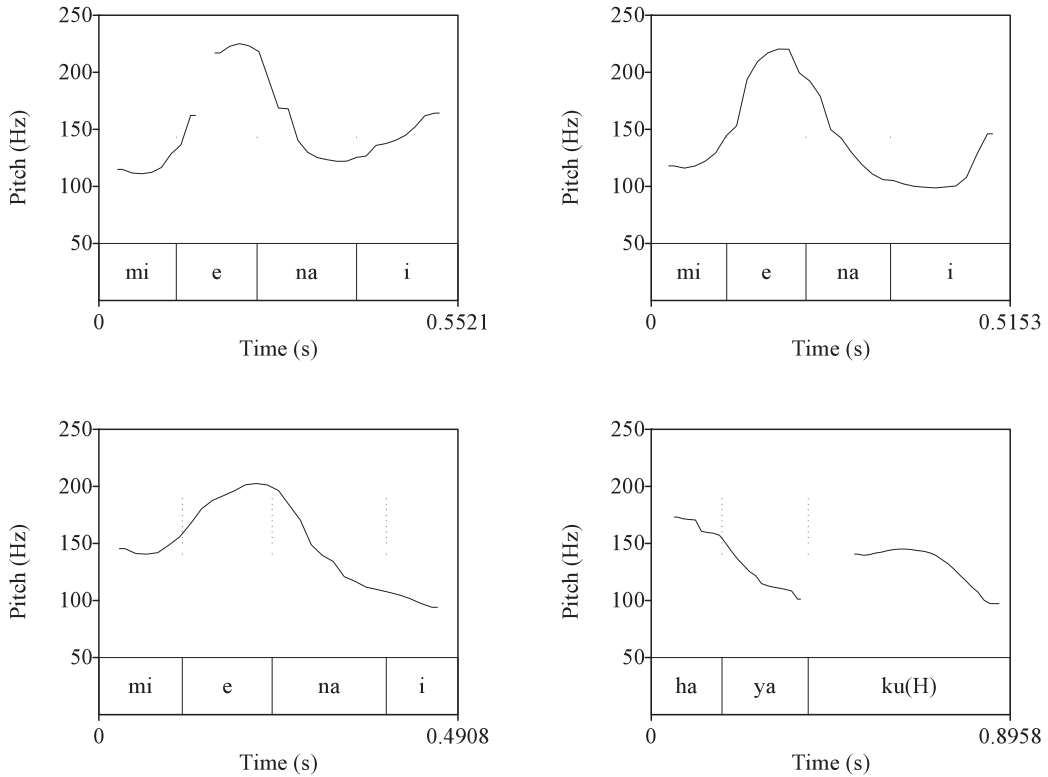
上昇下降調は、相手を促す際の「早く!(はやくっ!)」という発話に現れうるものである。また、発話中に区切りを入れる際に、発言がまだ終わっていないことを示す標識として用いられることもある。上昇下降調を伴う文(句)の末尾拍は長く発音される傾向があり、くだけた書き言葉では、これを仮名や長音符を添えることで表す場合がある(「早くう」「早くっ」「早くー」など)。

平調は、自然下降のみで特段の上昇も下降

表1 先行研究におけるイントネーションの分類

Venditti (2005)	郡 (1997)	川上 (1963)	本稿
insisting rise (H%)	強調上昇調 (↑)	第四種: 強めの上昇調	↑
question rise (LH%)	疑問上昇調 (↗)	第一種: 普通の上昇調	↗
		第二種: 浮き上がり調	
		第三種: 反問の上昇調	
rise-fall (HL%)	上昇下降調 (↑↓)	/	↑↓
境界音調無し(無記号)	平調 (無記号)		↘
	下降調 (↓)		↓

図1 「見えない↑」(左上)・「見えない↗」(右上)・「見えない↘」(左下)・「早く↑↓」(右下)



も伴わない音調である。下降調は、驚きのニュアンスをこめた発話に現れることがあり、句末でピッチが急に下降する（例:「本当！（ほんとお!）」）。上昇下降調と同様、下降調も末尾拍が長くなることが多く、仮名や長音符を添えて表記されることがある。

表1で比較される三つの分類法のあいだの違いは、イントネーションにおける音韻的な区別と音声的な差異—あるいはイントネーションの音韻的・文法的な側面と情意的な側面—を峻別することの難しさ（Gussenhoven 2004: 49–90, Vance 2008: 195）を反映していると言える。Vendittiの4分類を採用する立場から見れば、郡の平調と下降調の対立は、文法的イントネーション（grammatical

intonation）の問題ではなく、情意的イントネーション（affective intonation）の問題に過ぎないということになる。郡の疑問上昇調と川上の第一～三種とのあいだにも、同様の関係が成立する。

どの分類がもっとも適切かは、研究上あるいは応用上の個別の場面に依存する問題であり、単純に優劣をつけることは不可能であろう。しかしながら、日本語のイントネーションに少なくとも4種の音韻的区別（すなわちVendittiが認定するもの）があることは間違いなく、終助詞の意味機能を考える際にも、少なくともこの4種の場合に分けて考えることが必要である。

参考のため、図1に、強調上昇調、疑問上

昇調、平調、上昇下降調を伴う発話—強調上昇調・疑問上昇調・平調は「見えない」、上昇下降調は「早く（はやくう）」一の F0（基本周波数）を視覚化したものを例示する（下降調は省略）。上昇下降調のみ「早く」を用いているのは、上昇下降調は原則的に終助詞を伴わない独立文には用いられない（「見えない↑↓」という発話は不自然）という理由による（後述）。

3. イントネーション型と終助詞の機能との相関

近年の終助詞研究においては、終助詞の意味機能とイントネーションとのあいだに密接な関係があることは広く認知されてきている（橋本 1992, 蓮沼 1996, 井上 1997, 杉藤 1997, 森山 2001, Davis 2011 など）ものの、「上昇」対「非上昇（下降）」の二分法かそれに近いものだけを考慮している場合が多い。また、二種類の上昇調を分けて考える場合にも、それが強調上昇と疑問上昇の対立を問題にしているのか、それとも第一種と第三種の対立を問題にしているのかが不明瞭な場合があるなど、若干の混乱が見受けられる（3.1 節を参照）。

本節では、イントネーション型と終助詞の結合可能性および意味機能的相関を、概観的に検討する。ただし、下降調については、まれにしか現れない音調ということもあり、以下では考慮の対象から外す。

なお、末尾拍以外にアクセント核を持たない述語形式（例：「行く/行った」「越える/越えた」）に終助詞が後接する場合、述語形式末尾に下降が生じる場合と生じない場合とがある⁴⁾。例えば、疑問上昇調を伴う「行

よ」の場合（「もう行くよ / いいね / ）、「く」から「よ」にかけて下降がある発音と、ない発音の2つが可能であり、また、この2つには意味機能上の大きな違いはない。轟木（1993）は、これを終助詞の「低接」「順接」と呼んで区別している。低接・順接の違いは、述語形式の末尾拍のアクセントが実現するか否か、という問題に還元される。頭高型でも中高型でもない（単一の）述語形式が、末尾拍にアクセントを持つ場合と持たない場合があるということは、次のような例によって示すことができる（Vance 2008: 162-187）。

- (1) a. 行くから、心配しないで。（下線部のアクセント型は LHL。「く」のアクセントが実現している。）
 b. 行く人、いますか。（下線部のアクセント型は LHH。「く」のアクセントが実現しない⁵⁾。）

低接の「行くよ」は（1a）の場合と類比的であり、順接の「行くよ」は（1b）の場合と類比的である。低接による下降は、要はアクセントの問題であり、イントネーションとは区別してあつかう必要がある。以下、終助詞のイントネーションを例示する際には、低接・順接の区別が問題にならない「末尾拍以外にアクセント核を持つ述語形式（頭高型または中高型の述語形式）」を用いる。

3.1 疑問上昇調と強調上昇調

終助詞のつかない発話の場合、疑問上昇調によって付与される意味と、強調上昇調によって付与される意味は大きく異なる。上述のように、前者は典型的には問いかけに用いられ、後者は強い主張などに用いられる

図2 「まずいの↗」(左)「まずいの↑」(右)

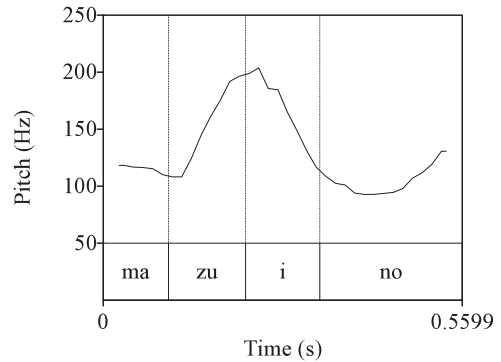
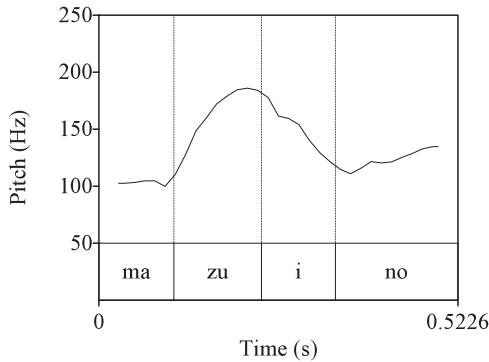
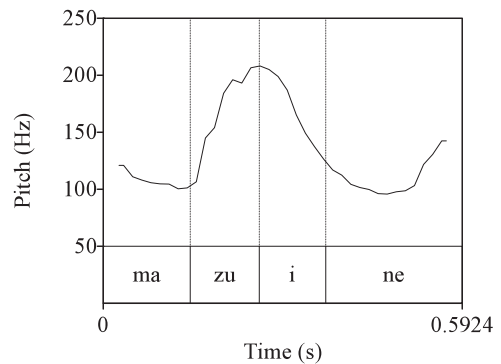
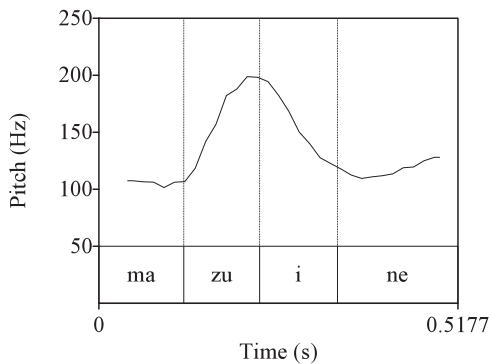


図3 「まずいね↗」(左)「まずいね↑」(右)



(例:問いかけの「飲む↗」と強い主張の「飲む↑」)。

終助詞のある発話の場合も同様に、強調上昇調と疑問上昇調では大きく談話機能が異なる。

- (2) a. まずいの↗ (問いかけ)
- b. まずいの↑ (強い主張)
- (3) a. まずいね↗ (確認要求)
- b. まずいね↑ (相手の同意を想定した言明など)

図2・図3に、(2)・(3)を実際に発音し、そのF0を視覚化したものを示す。

終助詞の種類によっては、疑問上昇調・強調上昇調との共起に制限がある。「の」「ね」「な」はどちらの音調とも結びつくが、「よ」「ぜ」「ぞ」「わ」は強調上昇調と結びつくことがなく、また、「さ」「もの(もん)」はどちらとも結びつかない。

上述のように疑問上昇調には「第一～三種」という下位種があるが、この三者の機能面での違いは情意的ニュアンスの差異にとどまる。より具体的には、「第二種」は「第一種」と比べてより「軽い態度」を伝え(川上1963: 283-284)、「第三種」には話者の「苛立ち」「不信」といった情意を伝達する働きがある。これは、終助詞なしの場合と終助詞ありの場合のどちらにもあてはまる。

表2 先行研究における上昇調の諸分類

郡 (1997)	川上 (1963)	田中・窪園 (1999)	小山 (1997)
強調上昇調 (↑)	第四種	(言及なし)	昇調 (↗)
疑問上昇調 (↗)	第一種・第二種	上昇 (↗)	
	第三種	疑問上昇 (↗)	降昇調 (↘)

田中・窪園 (1999) では、イントネーション型と終助詞の機能の関係を解説する際に「上昇」と「疑問上昇」を区別しているが、これは川上の「第一種」と「第三種」の区別に相当するものであり、「第四種」(=郡の「強調上昇」)は考慮の対象から外れている。また、小山 (1997) では、やはりイントネーション型と終助詞の機能の関係を論じるにあたって「昇調」と「降昇調」を区別しているが、「降昇調」が川上の「第三種」に相当する一方、「昇調」は「第一種」と「第四種」をひとまとめにしたものと見受けられる。小山が「昇調」の例として挙げるものには、(4) (p. 101) のように第四種を用いるのが自然なものと、(5) (p. 105) のように第一～三種を用いるのが自然なものが混在している。

(4) そろそろ野茂も打たれ出したね↑ (原文では↗)

(5) 髪に何かついてますよ↗

第一種と第四種とは、イントネーションの外形上も意味機能上もはっきりした違いがあり、これをひとまとめにすることは妥当ではない。郡 (1997)、川上 (1963)、田中・窪園 (1999)、小山 (1997) における上昇調の分類をまとめると表2のようになる。

(4)・(5) のような文の自然な発音における

イントネーションが疑問上昇か強調上昇かを直観的に判断するのは必ずしも容易ではないが、実際に発音したものを音響分析して結果を観察すると、(4) は強調上昇、(5) は疑問上昇であることがわかる (図4・図5)。

3.2 平調

前節で疑問上昇調・強調上昇調はすべての終助詞と結びつきうるわけではないことを指摘したが、平調は、どの終助詞とも結びつく可能性がある⁶⁾。ただし、終助詞が連続して現れる「(の/わ) よね」「よな」「わな」などは、平調とは結びつかない。

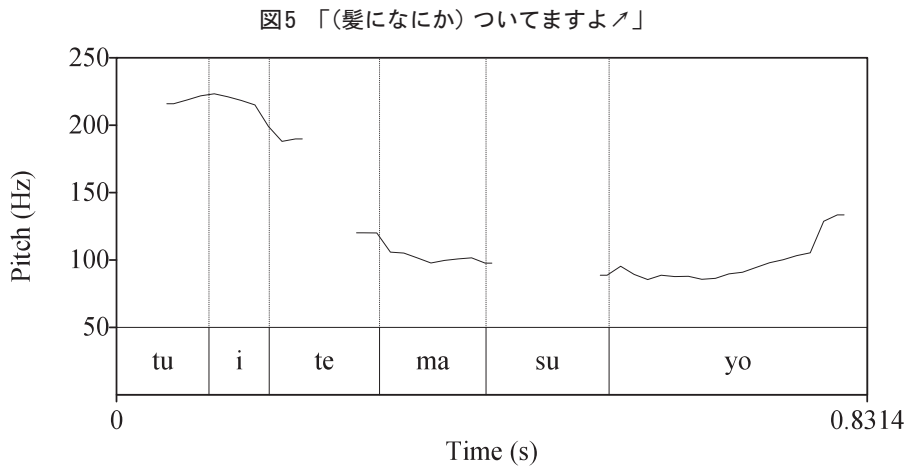
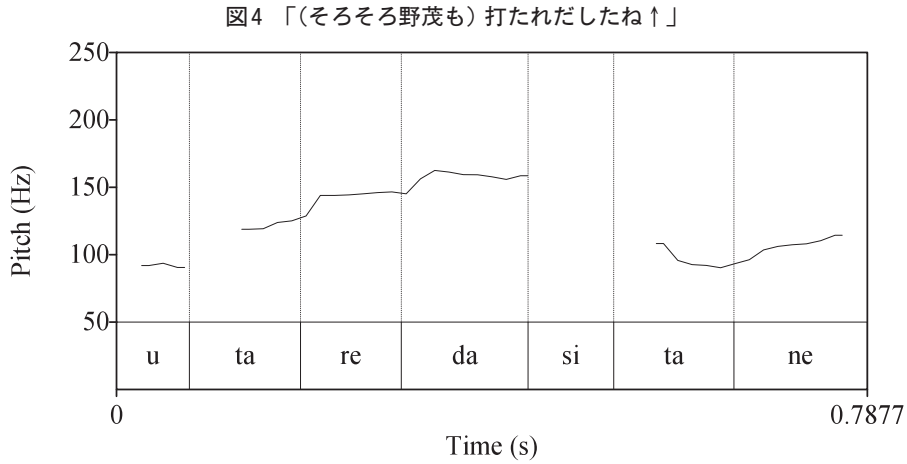
- (6) a. そんなの、おかしい {のよ/わよ} ↘
 b. # そんなの、おかしい (の/わ) よね ↘

3.3 上昇下降調

上昇下降調は、必ず終助詞とともに用いられるとは限らない (例:「早くっ↑↓」「あなたぁ↑↓」) が、文末の述語に現れる場合に限って言えば、「よ」「ね」のような終助詞の存在を前提とするものと言える。

(7) # 外は寒い↑↓

(8) (外で遊んで来いと言われた子供が)
 外は寒いよ (う) ↑↓



(9) (外出先から家に帰ってきた人物が)
外は寒いね (え) ↑↓

てはとりあげないが、これは「ね」の場合に準ずると考えられる。

終助詞のなかでも、上昇下降調と結びつく可能性があるものは「よ」「ね」「な」など一部に限られ、「の」「ぜ」「ぞ」「わ」「もの」などは結びつかない⁷⁾。

第4節、第5節で見ると、上昇下降調を伴う「よ」「ね」を含む発話は、情意的なニュアンスを帯びる。ただし、上昇下降調によって追加される伝達効果は、「よ」の場合と「ね」の場合でかなり異なる。「な」の場合につい

4. 「よ」の諸機能

本節では、音調別に、平叙文の文末に現れる「よ」の諸機能を解説する。「よ」は疑問上昇調、平調、上昇下降調と結びつくが、強調上昇調とは結びつかない。

なお、以下で論じる「よ」の諸機能のあいだには、同じ形式で表現される以上、当然、歴史的な派生関係と概念的な類似性・関連が

存在するが、この点に関しての本稿での議論は限定的なものにとどまる。第5節における「ね」の議論においても、この点は同様である。

4.1 疑問上昇調と「よ」

4.1.1 当為判断の材料

疑問上昇調を伴う「よ」(「よ↗」)の用法のうち、先行研究においてよく取りあげられてきたのは、(10)–(12)に例示されているものである(井上 1997, Takubo and Kinsui 1997, Davis 2011 など)。

(10) 髪に何かついてますよ↗ (= (5))

(11) もしもし、財布を落とされましたよ↗

(12) (レストランで、辛いスープを口にしようとしている友人に対して)
それ、辛いよ↗

この用法に関して、筆者は、Oshima (2012, forthcoming)において、既存の分析を批判的に検討したうえで、その機能は「発話の命題内容—発話によって描写される事態—が、聞き手が何をすべきか、および、何をしてもよいか、に関連を持つことを示す」ことであると分析を提示している⁸⁾。本稿では、この用法を〈当為判断の材料〉用法と呼ぶ。

4.1.2 親愛感情の表明

「よ↗」には、実質的な意味機能に乏しく、単に聞き手への親愛の念や親近感を示すためにだけに用いられる場合がある⁹⁾。これを〈親愛感情の表明〉用法と呼び、(13)–(15)に例を示す。

(13) (雑居ビルの5階の事務所に入ってきた

話者が、同僚に向かって)
なんか、1階に警察が来てた(よ↗)

(14) (電話で)

A: 大阪の暮らしはどう?

B: うん、結構楽しい(よ↗)

(15) (AはBの母親。Bは外出しようとしている。)

A: お弁当持った?

B: 持った(よ↗)じゃあ、行ってきます。

〈当為判断の材料〉用法の「よ」は典型的には聞き手に何らかの行為を促す際に用いられるが、促される行為は「話し手と対話を行う、または継続すること」でもありうる。対話をしたいという積極的な姿勢を示すことは、しばしば親愛感情を表明するための手段となる。〈当為判断の材料〉用法の「よ」がこのようなかたちで使われていくなかで、その表現効果が慣習的に固定化され、その結果〈親愛感情の表明〉用法が成立したと考えることができる。

実際、(13)・(14)では、「よ↗」の使用者は聞き手に対話への参加を促していると解釈することも可能である(ただし、(15)では話し手Bは「よ」を用いた直後に会話を切り上げており、そのような解釈はできない)。しかしながら、(13)・(14)における「よ」の使用が義務的ではなく、また、〈当為判断の材料〉用法の「よ」は一般に省略不可能であることを考えあわせると、やはり(13)・(14)の「よ」は〈親愛感情の表明〉用法のものであると考えるほうが妥当と思われる。

4.2 平調と「よ」

平調の「よ」(「よ↘」)には、少なくとも4つの用法を認めることができる。以下、これらを例示・解説する。

4.2.1 無知の非難

「よ↘」の用法のうち、先行研究でもっともよく取りあげられてきたのは、例(16)・(17)のように、話し手と聞き手の認識にギャップ、食い違いがある場面に現れるものである(小山1997, 伊豆原2003, Davis2011など)。

(16) A: 映画が始まる前に、何か食べない?

B: もうそんな時間はないよ↘ あと10分で始まるんだから。

(17) A: カナダの首都ってどこだっけ?

B: オタワだよ↘

筆者は、Oshima(2012, forthcoming)において、この用法の「よ↘」の機能は「聞き手が命題内容をあらかじめ認識しているべきであった」という情報を示すことであるとする分析を提案している¹⁰⁾。この〈無知の非難〉用法には「聞き手のすべきこと(義務)」に関わるという点で、上述の〈当為判断の材料〉とのつながりが認められる。

4.2.2 命題内容に対する感情の表明

「よ↘」には、命題内容やその程度に対して話者が、感銘・落胆・驚きなどの強い感情を抱いていることを示す働きもある(田中・窪園1999:122-123)。表明される感情は、(18)のように肯定的なものの場合もあれば、(19)のように否定的なものの場合もある。

(18) 山田さんが手伝ってくれたおかげで、

早く終わったよ↘

(19) (話者は一週間前に野球場で財布を紛失した。聞き手はそれを知っている。)

財布、やっぱりみつからなかったよ↘

(20) のようなケースでは、表明されている感情は、価値判断を含まない、中立的な驚きと解釈することができる。

(20) (窓の外を見て)

おや、雪が降ってるよ↘

4.2.3 心理状態の詠嘆的表明

「よ↘」には話し手が自らの心理状態を報告する発話に用いられ、詠嘆的なニュアンスを追加する用法もある。

(21) ありがとう。嬉しいよ↘

(22) あの時は、本当に悲しかったよ↘

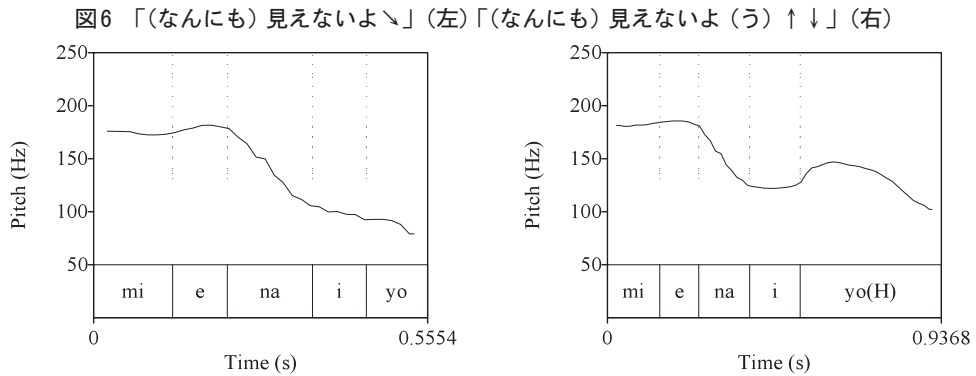
この用法は、上述の〈命題内容に対する感情の表明〉用法と連続性を持つが、「よ↘」によって強調される感情の対象は命題内容ではないことに注意する必要がある。例えば、(21)では、「よ」は「話者が嬉しさを感じている」という命題内容に対しての話者の感情を伝えているわけではない¹¹⁾。

4.2.4 意向・予定

「よ↘」は話し手が自らの意向・予定を表明する発話にも用いられる。

(23) 臨時収入があったから、今日は僕がおごるよ↘

(24) (職場からの帰途、同僚たちから居酒屋



と一緒に来るよう誘われて)
今日は疲れているから、まっすぐ帰る
よ↘

(25) (将棋の対局に負けて)

悔しいなあ。次は絶対に勝ちますよ↘

この用法の「よ↘」は、行為拘束型の発語内行為 (commissive illocutionary act. Searle 1979 の用語) の標識として機能していると理解することができる。

4.3 上昇下降調と「よ」

上昇下降調の「よ」(「よ↑↓」) の機能は、平調のものの変種と理解することができる。平調のかわりに上昇下降調を用いると、発話に子供っぽく甘えたニュアンスが加わり、話者が聞き手に同情を求める気持ちが表明される。

(26b) は〈命題内容に対する感情の表明〉用法の変種, (27b) は〈心理状態の詠嘆的表明〉用法の変種の例である。また, (28) は〈無知の非難〉用法の変種, (29) は〈予定・意向〉用法の変種の例である。図6に, (26a, b) の発話例の音調 (一部) を示す。

(26) (望遠鏡を覗いたが、霧がかかっている何も見えない)

- a. なんにも見えないよ↘
- b. なんにも見えないよ(う)↑↓

(27) (上司からの電子メールを見て)

- a. また呼び出した。気が重いよ↘
- b. また呼び出した。気が重いよ(う)↑↓

(28) これは僕のおもちゃだよ(う)↑↓

(29) (子供が、親が持っている風船を持ちたがって)

僕が持つよ(う)↑↓

話者が同情を求めていることが文脈的に明らかな場合、「よ↑↓」の使用は不自然なものとなる。

(30) # 山田さんが手伝ってくれたおかげで、早く終わったよ(う)↑↓

(31) # ありがとう。嬉しいよ(う)↑↓

5. 「ね」の諸機能

本節では、音調別に、平叙文の文末に現れる「ね」の諸機能を解説する。「ね」は疑問上昇調、平調、上昇下降調に加え、強調上昇調とも結びつく。ただし、「ね」と平調との組み合わせについては、位相的に偏りがあることが指摘されている（犬飼 2001）。

「ね」の用法のうちの多くは、「聞き手が命題内容に同意するという見込みを話者が持っている」ことを伝達するという性質を持つ。

5.1 強調上昇調と「ね」

5.1.1 共有認識

強調上昇調を伴う「ね」（「ね↑」）は、典型的には、聞き手が認識していると想定される事柄をあらためて述べる発話に用いられる。本稿ではこの用法を〈共有認識〉用法と呼ぶ¹²⁾。

(32) (寒いなか、一緒にバスを待っている恋人に対して)

寒いね↑

(33) (繁華街を一緒に歩いている友人同士の会話)

A：今日は人出が多いね↑

B：そうだね↑

(34) A：来週は試験かあ。

B：嫌だね↑

(35) (将棋の対局相手に対して)

お強いですね↑

(32)・(33A, B)・(34B) のような発話は、

情報の提供ではなく、話題の提起や、あるいは話者と聞き手の共通基盤 (common ground。Brown and Levinson 1987: 117-124 を参照) を喚起・承認することで友好的な関係を構築・維持することを目的とするものである。逆に言うと、〈共有認識〉用法の「ね」は、発話の目的が典型的な意味での情報伝達ではないことを示す働きを持つ。

5.1.2 照会

「ね↑」には、発話の命題内容が談話の現場で考えたり、記憶を探ったり、何かを調べたりした結果得られた情報であることを示す用法もある (Takubo and Kinsui 1997: 755, 宮崎・他 2002: 279, 日本語記述文法研究会 2003: 257 など)¹³⁾。

(36) A：山田さんの内線番号わかる？

B：ええと、たしか 5524 だね↑

(37) A：今、何時？

B：(時計を見ながら) ええと、4 時だね↑

(38) (B は昨年、ベトナムに 3 ヶ月間滞在していた。)

A：向こうの食事はどうだった？

B：意外とおいしかったね↑

(39) (イタリア対スペインのサッカーの試合が始まろうとしている。)

A：どっちが勝つと思う？

B：ううん、多分、イタリアが勝つね↑

5.1.3 拒絶

「ね↑」には、先行する発話に対する拒絶的な反応を示す用法もある (宮崎・他 2002: 280, 日本語記述文法研究会 2003: 257)。

(40) A: そこを何とか頼むよ。

B: 嫌だね↑

(41) A: やっぱりそんなもの無いんじゃないかな。

B: いいや、絶対にあるね↑

(34B) の「嫌だね」が同調的態度を示すのに対し、(40B) のそれは反対の拒絶的態度を示す。2つの「嫌だね」は、多くの場合声の調子などで区別可能だが、イントネーション型の上では同一である。

5.2 疑問上昇調と「ね」

5.2.1 確認要求

疑問上昇調を伴う「ね」(「ね↗」)の中心的な機能は、確認の要求である(小山 1997, 田中・窪園 1999, 他多数)。

(42) これが豆だね↗

(43) 待ち合わせの時間は、6時だね↗

この〈確認要求〉用法は多くの先行研究で取りあげられており、「ね」の代表的な機能の1つと言える。

5.2.2 承認要求

「ね↗」には、話者の意向を述べた文に添えられ、その意向に対する聞き手の承認を求める用法もある¹⁴⁾。

(44) これ、ちょっと借りるね↗

(45) じゃあ、5時になったらまた迎えに来るね↗

これは、〈確認要求〉の「ね↗」を含む「借りても構わないね↗」「5時にまた迎えに来るつもりだけど、それでいいね↗」のような発話が縮約されることで成立したものではないかと推測される。

〈承認要求〉の「ね↗」は、(46)のように、聞き手が話者の意向に対して反対することが考えにくい場合にも用いられることがある。この例では、話者は、「おみやげを買うこと」が聞き手のネガティブ・フェイス(他者から自分のテリトリーを守り、行動の自由を保ちたいという欲求)を侵害する可能性に配慮し、緩和的的行為(redressive action)として形式的に聞き手の承認を求めていると考えられる¹⁵⁾。

(46) (海外旅行に行く人が、空港まで送ってくれた友人に向けて)

ありがとう、おみやげ買ってくるね↗

聞き手の依頼や命令に応じてそれを遂行する意向があることを述べる発話では、〈意向・予定〉用法の「よ↘」(4.2.4節)は現れ得るが、〈承認要求〉用法の「ね↗」の使用は不自然である。これは、表明された意向が、聞き手の意思にかなったものであることがすでに明らかであり、あらためて承認を求めることが不適切であるためである。

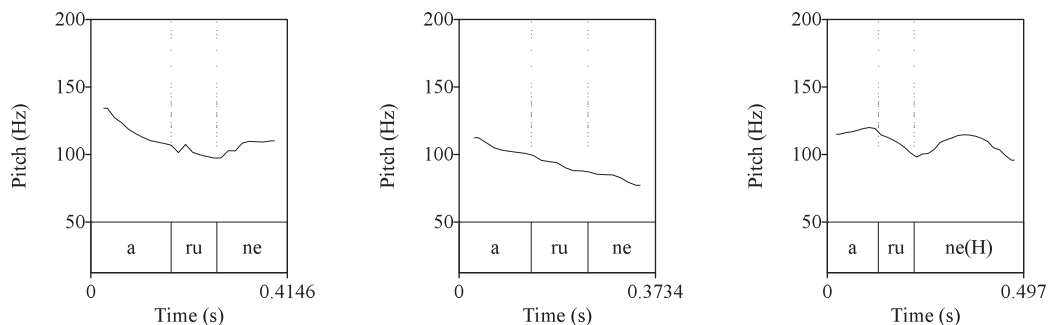
(47) A: 明日は万が一にも遅刻しないよう、気をつけてください。

B: ええ、気をつけます。

B': ええ、気をつけますよ↘

B'': # ええ、気をつけますね↗

図7 「(桃の木が) あるね↑」(左)「(桃の木が) あるね↘」(中央)「(桃の木が) あるね(え)↑↓」(右)



5.3 平調・上昇下降調と「ね」

平調・上昇下降調を伴う「ね」(「ね↘」「ね↑↓」)は、強調上昇調を伴う「ね」(「ね↑」)の〈確認要求〉用法および〈照会〉用法と似通った機能を持つ。平調・上昇下降調を用いた場合、強調上昇調を用いた場合と異なり、話者が命題内容に対して強い感情を抱いていることが表明される。

「ね↘」と「ね↑↓」の談話機能はほぼ同一である¹⁶⁾。「よ」の場合と異なり、上昇下降調を用いても子供っぽく甘えたニュアンスは生じず、成人が改まった間柄の相手に用いても不自然にはならない。また、同情を求める気持ちが表現されることもない。

5.3.1 共有認識+感情表明

「ね↘」および「ね↑↓」には、〈共有認識〉の「ね↑」と似た、聞き手が命題内容に同意することが想定される場面で用いられる用法がある。

(48) (繁華街で、一緒に歩いている友人に対して)

- a. 今日は人出が多いね↘
- b. 今日は人出が多いね(え)↑↓

(49) (部屋に入ってきた人が、もともと部屋

の中にいた人に対して)

- a. おっ、中は暖かいね↘
- b. おっ、中は暖かいね(え)↑↓

上述のように、〈共有認識〉の「ね↑」と異なるのは、あわせて話者が発話で描写される事態やその程度に対して驚きなどの強い感情を抱いていることが表明されるという点である。たとえば、(50a)は目についたこと、意識にのぼったことを何の気なしに口にした発話と捉えることが可能なのに対し、(50b, c)では、話者の「桃の木があること」に対する強い感情が伝達されている。図7に、(50a-c)の発話例の音調(一部)を示す。

(50) (公園を一緒に歩いている友人に対して)

- a. 桃の木があるね↑
- b. 桃の木があるね↘
- c. 桃の木があるね(え)↑↓

命題内容が、強い感情を抱くのにそぐわないものである場合、「ね↘」「ね↑↓」の使用は不自然なものとなる。

(51) (夫婦で映画を見に行き、帰りの電車

に乗っている。電車は特にトラブルもなく、夫妻の家の最寄り駅に到着する。夫が言う。)

- a. 着いたね↑
- b. # 着いたね↘
- c. # 着いたね(え)↑↓

5.3.2 照会+感情表明

「ね↘」および「ね↑↓」には、〈照会〉の「ね↑」と似た用法もある。〈照会〉の「ね↑」との違いは、あわせて、話者が命題内容に対して強い感情を抱いていることが表現されることである。例えば、(52B', B'')では、「ね↘」「ね↑↓」を用いることで、命題内容に対して話者が感銘などの強い感情を抱いていることが表現されている。

(52) (Bは昨年、ベトナムに3ヶ月間滞在していた。)

- A: 向こうの食事はどうだった?
- B: 意外とおいしかったね↑
- B': 意外とおいしかったね↘
- B'': 意外とおいしかったね(え)↑↓

(53b, c)では、「ね↘」「ね↑↓」を用いることで、話者が落胆や同情の念を感じていることを伝達しようとしていると解釈することが自然である。(53a)は、このような伝達効果を欠くため、この場面ではやや冷淡な言い方であると感じられる。

(53) (聞き手は6時まで東京駅に行きたいが、今からでは間に合わないかもしれないと思っている。話者は、時刻表を見ながら話している。)

- a. やっぱり、今からじゃ間に合わない

ね↑

- b. やっぱり、今からじゃ間に合わない
ね↘
- c. やっぱり、今からじゃ間に合わない
ね(え)↑↓

同様に、(54B', B'')と比べ、(54B)では、話者が残念だ、申し訳ないという気持ちを抱き、表明することが期待される場面であるにも関わらず中立的な「ね↑」が用いられているため、やや横柄で配慮に欠ける言い方と受け取られる可能性が高い。

(54) A: できれば、来週中に納品してほしいんだけど。

B: 来週中っていうのは、ちょっと難しいですね↑

B': 来週中っていうのは、ちょっと難しいですね↘

B'': 来週中っていうのは、ちょっと難しいですね(え)↑↓

(51)の場合と同様、(55)では、命題内容が強い感情を抱くのにそぐわないものであるため、「ね↘」「ね↑↓」の使用は不自然なものとなる。

(55) A: 山田さんの内線番号わかる?

B: ええと、たしか5524だね↑

B': # ええと、たしか5524だね↘

B'': # ええと、たしか5524だね(え)↑↓

6. 結語

以上、本稿では、日本語(標準語)の終助

表3 「よ」「ね」の諸用法の整理

音調	「よ」	「ね」
強調上昇調 (↑)		〈共有認識〉 〈照会〉 〈拒絶〉
疑問上昇調 (↗)	〈当為判断の材料〉 〈親愛感情の表明〉	〈確認要求〉 〈承認要求〉
平調 (↘)	〈無知の非難〉 〈命題内容に対する感情の表明〉 〈心理状態の詠嘆的表明〉 〈予定・意向〉	〈共有認識+感情表明〉 〈照会+感情表明〉
上昇下降調 (↑↓)	平調のものに情意的なニュアンス (同情の訴求) が追加される	

詞の機能を分析・記述するにあたって「強調上昇調」「疑問上昇調」「平調」「上昇下降調」という4種の音調の区別を考慮する必要があることを示したうえで、代表的な終助詞「よ」「ね」の機能を音調別に検討・解説した。とりあげた諸用法を、表3にまとめて示す。

個々の用法の記述・分析に関しては、今後さらなる精緻化が求められる。また、本稿では、「よ」「ね」が平叙文以外に現れる場合、他の終助詞や助動詞と組み合わせ用いられる場合、などについては考慮しなかった。今後の課題としたい。

注

- 1) 本稿における「文末イントネーション」は、厳密には文という統語的単位ではなく、イントネーション句 (韻律句, *major phrase*) と呼ばれる音韻的な単位と結びつき、その末尾に現れるものである (Vance 2008: 196)。
- 2) 発話末にあらわれる「の」については、助動詞「のだ」の「だ」が脱落したものとみなす立場もある (野田1997など) が、本稿では終助詞とみなす。これは、「の」と「のだ」には文体・話体面だけでなく、機能面でもかなりの違いが見られるという点を考慮したものである。例え

ば、「推論による帰結」を表す「のだ」を「の」で言い換えることはできない。

- (i) a. 地面が濡れている。(おそらく) 雨が降ったのだ。
b. #地面が濡れているわ。(きっと) 雨が降ったの。
- 3) ただし、〈確認要求〉用法の「ね」(5.2節) を伴う文などは、疑問文の一種と理解することも可能である。本稿で「疑問文」として考慮の対象から外すのは、「だれ」「何」などの疑問詞や「か」のような疑問の標識を含む文である。
 - 4) 終助詞の種類や文末イントネーションの型によっては「下降あり」「下降なし」のうち一方の発音だけが可能となる。例えば、疑問上昇調を伴う「の」の場合 (「行くの?」)、下降ありの発音のみが可能である。
 - 5) 「来る人」のアクセント型が通常は (HLLHではなく) HLLLとなることから、「動詞終止形 (辞書形) + 名詞」からなる統語的句は通常単一のアクセント句として実現されると考えられる。したがって、「行く人」の「く」にアクセントがあるならば、それは下降として実現されるはずである。
 - 6) ただし、女性語的な「わ」(「あっ、私の番だわ↗」) と、男性的な発話にも用いられる「わ」(「じゃあ、俺はもう帰るわ↘」) を別のものとみなせば (宮崎・他2002: 271-273, 日本語記述文法研究会2003: 252-253)、前者は平調とは結びつかないということになる。
 - 7) 「の」は、役割語 (金水2003) としての老人

- 語（フィクションのなかに現れる、ステレオタイプ的な老人の話し方）などでは、上昇下降調と結びつきうる（「外は、寒いのは（う）↑↓」）。
- 8) 同様の方向性を持つ分析として、井上(1997)および伊豆原(2003)のものが挙げられる。
- 9) 宮崎・他(2002:266-267)に類似の指摘がある。
- 10) 日本語記述文法研究会(2003:204)でも「よ」がこのような用法を持つことが指摘されている。ただし、同書ではこの用法の「よ」は典型的に上昇調を伴うとしている。
- 11) 例えば(i)のように、話し手の感情を報告する発話に〈命題内容に対する感情の表明〉用法の「よ」を付加し、自分がその感情を抱いていることに対する感情(驚きなど)を表明することも可能である。
- (i) (仲が悪かったはずの知人が戻ってくると聞いて、思いがけず嬉しい気持ちになる)
あれっ、俺、喜んでよゝ
- 12) 大曾(2005:4)では、これを「一致の『ね』」と呼んでいる。
- 13) 金水(1993:16)、宮崎・他(2002:279)などでは、この用法を「自己確認」と呼んでいる。宮崎・他(2002:280)が「回想」用法と呼ぶものも、本稿では〈照会〉用法の一種とみなす。
- 14) 宮崎・他(2002:279)では、この用法を「行動宣言」と呼んでいる。
- 15) Brown and Levinson(1987:65-67)は、申し出や約束を、(命令などと同様に)聞き手のネガティブ・フェイスを侵害する恐れのある行為とみなしている。
- 16) ただし、両者のあいだに性別、方言などに関わる位相差があることは考えられる(犬飼2001)。

参考文献

- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Reissue edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Davis, Chris. 2011. *Constraining Interpretation: Sentence Final Particles in Japanese*. Ph. D. thesis, University of Massachusetts.
- Gussenhoven, Carlos. 2004. *The Phonology of Tone and Intonation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 橋本修. 1992. 「終助詞『ね』の、意味の型とイントネーションの型—長く急激な下降イントネーションの解釈を中心に—」『日本語学』11(11): 89-97.
- 蓮沼昭子. 1996. 「終助詞『よ』の談話機能」上田功・高見健一・蓮沼昭子・砂川有里子・野田尚史(編)『言語研究の領域 小泉保博士古稀記念論文集』大学書林, pp. 383-395.
- 井上優. 1997. 「『もしもし、切符を落とされましたよ』—終助詞『よ』を使うことの意味」『月刊言語』26(2): 62-71.
- 犬飼隆. 2001. 「低く短く付く終助詞『ね』」音声文法研究会(編)『文法と音声3』くろしお出版, pp. 17-29.
- 伊豆原英子. 2003. 「終助詞『よ』『よね』『ね』再考」『愛知学院大学教養部紀要』51(2), 愛知学院大学, pp. 1-15.
- 川上泰. 1963. 「文末などの上昇調について」『国語研究』16, 國學院大學国語研究会, pp. 25-46.
- 金水敏. 1993. 「終助詞ヨ・ネの意味論的分析」『学習と対話』93(1), 認知科学会, pp. 13-19.
- 金水敏. 2003. 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店.
- 郡史郎. 1997. 「日本語のイントネーション型と機能」国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫(編)『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂, pp. 169-202.
- 小山哲春. 1997. 「文末詞と文末イントネーション」音声文法研究会(編)『文法と音声』くろしお出版, pp. 97-119.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『モダリティ』東京: くろしお出版.
- 森山卓郎. 2001. 「終助詞『ね』のイントネーション」音声文法研究会(編)『文法と音声3』くろしお出版, pp. 31-54.
- 日本語記述文法研究会(編). 2003. 『現代日本語文法4: 第8部モダリティ』くろしお出版.
- 野田春美. 1997. 『の(だ)の機能』くろしお出版.
- 大曾美恵子. 2005. 「終助詞『よ』『ね』『よね』再考—雑談コーパスに基づく考察—」鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ(編)『言語教育の新展開: 牧野成一教授古稀記念論集』ひつじ書房, pp. 3-15.
- Oshima, David Y. 2012. The Japanese particle *yo* in declaratives: Relevance, priority, and blaming. In

- Manabu Okumura, Daisuke Bekki, and Ken Satoh (eds.) *New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAISAI 2011 Workshops, Takamatsu, Japan, December 2011, Selected Papers*. Heidelberg: Springer, pp. 40–53.
- Oshima, David Y. forthcoming. On the functions of the Japanese discourse particle *yo* in declaratives. In Eric McCready, Katsuhiko Yabushita, and Kei Yoshimoto (eds.) *Formal Approaches to Semantics and Pragmatics*. Heidelberg: Springer.
- Searle, John R. 1979. *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 杉藤美代子. 1997. 「終助詞『ね』の意味機能とイントネーション」音声文法研究会（編）『文法と音声』東京：くろしお出版, pp. 3–16.
- Takubo, Yukinori and Satoshi Kinsui. 1997. Discourse management in terms of mental spaces. *Journal of Pragmatics* 28(6): 741–758.
- 田中真一・窪園晴夫. 1999. 『日本語の発音教室』くろしお出版.
- 轟木靖子. 1993. 「東京語の文末詞の音調と形容詞・動詞のアクセントについて」『Studium』20, 大阪外国語大学大学院生協議会, pp. 14–34.
- Vance, Timothy J. 2008. *The Sounds of Japanese*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Venditti, Jennifer J. 2005. The J_ToBI model of Japanese intonation. In Sun-Ah Jun (ed.) *Prosodic Typology: The Phonology of Intonation and Phrasing*. Oxford: Oxford University Press, pp. 172–200.